

金子暢子

一人居の食事なれど味気なし

テレビのみ声高鳴りてそつと茶をのむ

味気なき食事終わりて茶をすする

紅葉の手振って別れし後の静けさ

又おいで次のおいでを待つ老等

明り射す孫ら揃えば声高し

コンバンハ言葉覚えてはずむ声

じじの膝すわりてうれし笑顔かな

施設行き軽くて温かい服届く

耳寄せて話す昔の苦労話

思い出が同じになりてはずみけり

又来週風邪を引かずに転ばずに

友の元気祈りて送る又来週

葉っぱ無しの柿が絵になる日和かな

みかん山日毎色増す黄金かな

昔の田見渡す限りビニールハウスなり

残したる二つの柿に小鳥群れる

明日ありと知らぬ生身の命なれ

その昔ペニシリンとて肺炎に効く薬あり

幼子が風邪ひき肺炎になりし時、四街道に金山医者と言う元

軍医の人が居て、幼子にすぐ注射してくれた。その薬の名は

ペニシリン。ぐったり弱った幼子に一本の注射で元気を取り

戻し、帰りは色々話しては母子の会話が弾んだ。

今の世に一発で聞く癌の薬があったら、どんなに助かるか

知れない、文化、医術が進んだ世に一刻も早く効く薬が出て欲しい。

ノーベル賞に輝くでしょう。